



ラムサール条約登録湿地 厚岸湖・別寒辺牛湿原 厚岸水鳥観察館だより

タンチョウの子育ては？

厚岸湖・別寒辺牛湿原で越冬していたオオハクチョウ、オオワシ・オジロワシのほとんどが、4月中に極東ロシアへと北上して行き、代わりに夏鳥の声が聞こえるようになりました。厚岸に留まり、水鳥観察館前で毎年子育てをしているオジロワシのつがいは、今年の子育てに失敗してしまったようです。

3月に給餌場から湿原に戻ってきたタンチョウは、4月中旬に、観察館からは見えない丸山の裏でいったん巣を作り、子育てを試みたようです。しかし、5月始めに何らかの理由で巣を放棄。今年の子育て失敗か?!と思われましたが、5月16日に観察館カメラの前に再び巣を作り、卵を温め始めました。今年2回目の子育てのため、例年よりはやや遅れ気味でしたが、6月24日、ヒナを連れて歩き回り始めました。草が茂っていてヒナが目立たないので、今年キツネにやられずに巣立てるかも?!



他の生き物は？



春に多くみられたカモ類のほとんどは、北に向けて飛び立ちました。観察館周辺では、カッコウやツツドリ、ウグイスなどの夏鳥の声が盛んに聞こえます。

厚岸で生まれたオジロワシは、夏になっても北へは向かわず、厚岸に留まります。厚岸生まれの肩が白いオジロワシの若鳥が、観察館上空を飛んでいるのが見られます。

湿原ではキタキツネがタンチョウの周りをうろついています。エゾシカも子育ての真っ最中。

別寒辺牛川で行われている調査研究

多くの生物が生息する別寒辺牛湿原では、様々なチームが生物の調査研究を行っています。今回は、北海道大学の研究チームによるイトウ調査を紹介します。

幻の魚「イトウ」を追って

北海道大学大学院環境科学院 本多健太郎

イトウってどんな魚？

イトウは、日本では現在北海道のみに生息する日本で最も大きい淡水性の魚です（写真1）。最大で1.5mくらいまで成長すると言われ、20年以上生きるものもあります。

イトウはサケと同じ仲間ですが、秋に産卵するサケと違い、春に川の上流で卵を生みます。その後は、川の上流から海まで広い範囲で生活しますが、サケのように遠くの海に出ることはないと考えられています。

イトウの数は、北海道各地で最近大幅に減少し、絶滅が心配されています。今では、その数の少なさから「幻の魚」と言われるようになってしまいました。

イトウの生態を知るために

数の減ったイトウを守るためには、イトウの住む環境を守らなくてはなりません。しかし、イトウがどの季節にどこにいるのか、また、そこで何をしているのかについては、実はよくわかっていません。そのため、どのような環境を守ればよいのかについてもよくわからないのが現状です。

そこで、北海道大学の研究チームでは、厚岸町を流れる別寒辺牛川全体（写真2）で、イトウの行動追跡調査を2006年から毎年行っています。春、別寒辺牛川の上流から下流までのたくさんの場所に、超音波受信機という、文字通り超音波を受信するための機械を沈めます。そして、産卵を終えて上流の産卵場からおりてくるイトウを捕まえます（北海道より許可をもらっています）。捕まえたイトウに麻酔をかけて、お腹の中に、小型の超音波発信器（超音波を発信する機械）を埋め込みます。その後、麻酔から覚めるのを待って放流します（写真3）。

放流後、発信器を付けたイトウが、沈めた受信機の近くを通ると、受信機は、そのイトウが通過した時刻と、イトウの個体番号を記録します。別寒辺牛川流域に沈めた受信機を数ヶ月後に回収し、記録されたデータを調べることで、放流したイトウが、「いつ・どこに」いるのかを知ることができます。

ちなみに、今年の調査では26台の受信機を別寒辺牛川や厚岸湖に沈めて、15尾のイトウを追っています。なお、過去の調査の結果は情報館や水鳥観察館などで見ることができます。



写真1. 別寒辺牛川のイトウ

調査って大変？

野外での生物の調査にはハブニングはつきもので、水温が5℃以下の川でカヌーが転覆したり、林道を走っているときに車がパンクしたり、ときには高価な機械を川に落としてしまったり（笑えません）・・・と挙げたらきりがありません。また、これはハブニングではありませんが、11月下旬に川が凍り始める時期には、カヌーに乗って持つオールがツルハシに変わります（写真4）。砕氷船となったカヌーは通常時の半分以下のスピードしか出ず、その分一生懸命に漕ぐため、気温は氷点下なのに汗だくになってしまいます。

そして、調査をしていて一番怖いのは、やはり川の周りに生息しているヒグマの存在です。今春、静寂に包まれた川をいつものようにカヌーで下っていたとき、シカの足音とは明らかに違う、ザッザッザッという大きな足音が聞こえてきました。音のする方を見ると、一頭のヒグマが川岸の斜面を駆け上がっていくのが見えました。次の瞬間、ウォッウォッという低いなり声が、斜面を登るクマとは別の場所から響いてきました。もう一頭いたのです。体長2mを超すその巨大なヒグマは川岸から私たちを威嚇していました。その距離わずか20m、すかさず、常に携帯している熊撃退用のスプレーに手を伸ばし、最悪の事態に備えました。幸いにもヒグマは背を向き、ゆっくりと斜面を登っていきました。これは、人生でも数少ない、「死ぬかも!!」ということ意識した瞬間であり、同時に人生でもっとも謙虚な気持ちになった瞬間でもありました。

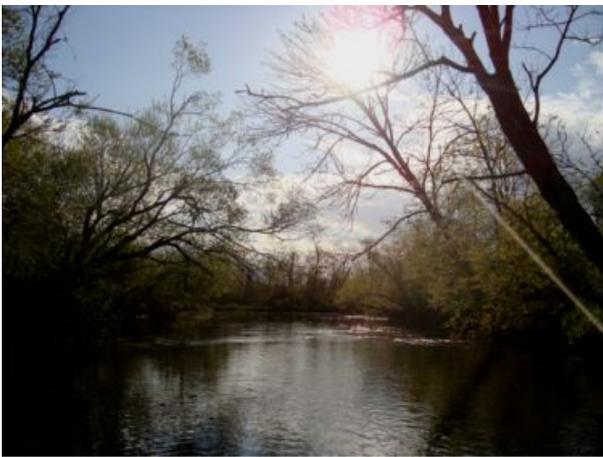


写真2. 別寒辺牛川中流域。



写真3. 発信器を付けたイトウを放流する様子。放流しているのは筆者。



写真4. オールとカヌーがツルハシと砕氷船になった様子。

【水鳥観察館より】

おそらく彼らが水鳥観察館のカヌーを一番利用しているグループ。

砕氷船として?! 万能移動船として?!

そのせいで? パドル（オール）はボロボロ、船底の塗装はハゲハゲ、その他...

館の道具がフルに利用されて貴重なデータが取れていると思うと...

イトウ調査グループの皆さん、ヒグマに食べられないよう頑張ってください!

厚岸やちっこクラブスタート！

自然に興味がある厚岸町周辺の小中学生を集めた「やちっこクラブ」。5月から活動がスタートしました。集まったキッズレンジャーは8名。第1回は5月10日、愛冠岬で春の草花を観察しました。森づくりセンターの溜池ではエゾサンショウウオの卵やエゾアカガエルのオタマジャクシ、アマガエルを見つけて大喜び。第2回は5月30日、子野日公園で初夏の野鳥と草花を観察。大きなエゾリスにみんな大興奮。第3回は6月14日、愛冠岬で夏鳥の観察を行う予定でしたが、雨のため、ネイパル厚岸の室内で野鳥の鳴き声について勉強会をしました。サポーター・協力員の大人たちといっしょに、子供たちも楽しんで活動しています。



アズマイチゲとそれを観察する参加者

キッズレンジャー募集！

厚岸湖や別寒辺牛湿原、その周辺には、野鳥だけではなく、いろいろな生きものがいっぱい。これらの生きものの季節ごとの不思議な姿を観察したり、厚岸の自然を体で感じてみませんか！毎月1～2回、日曜日の開催です。季節ごとのプログラムを計画中！

～申込み・問い合わせ～
水鳥観察館 TEL：52-5988
bekan@marimo.or.jp



あっけし みずどり かんさつかん
厚岸水鳥観察館

☎088-1140
北海道厚岸郡厚岸町サンヌシ6番地
TEL (0153)52-5988 FAX (0153)53-2121
URL: <http://www.marimo.or.jp/AWOC/>